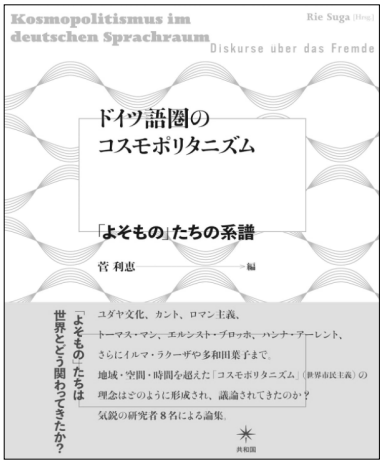
ドイツ語圏のコスモポリタニズム――「よそもの」たちの系譜

菅利恵　編著



木田　綾子（評）

本書は、ドイツ語圏におけるコスモポリタニズムという概念をめぐって、18 世紀のカントから 21 世紀の多和田葉子まで、個々の歴史的背景の文脈においてどのような言説が繰り広げられてきたのかを、8 人の専門家それぞれの視点から分析した論文集である。コスモポリタニズムとは、世界を一つの共同体ととらえる観念だが、本書が主張するのは、この考えに基づく普遍的な価値観を世界で共有しようとするものではない。特定の集団による基準の正当化に潜む暴力性に、本書は警鐘を鳴らす。特定の国家に属する成員から外れる者たちを排除する力が働くからだ。そこで重要になるのが、副題にもある「よそもの」たちの視点である。

では、「よそもの」とは誰なのか。それは、カントによれば、あるときは言論統制にさらされた知識人だった（第一章）。あるいは亡命先のアメリカでドイツを描いたトーマス・マン（第五章）や、越境する 21 世紀の創作者たち、もしくはその作中人物（第八章）である。枠に組み込まれてこなかった女性たちも、ある意味で「よそもの」の系譜に属する（はじめに）。彼らに共通するのは、距離を保ちながら世界と向き合う視点である。

18 世紀の啓蒙主義時代は、普遍的人間性を重視した道徳的なコスモポリタニズムが流行し、国家や世界のあり方を、ヴィーラントは物語の中で模索し（第一章）、後にノヴァーリスは詩的国家として構想した（第二章）。そして国や言語を越えた文学の交流を志向した晩年のゲーテは、世界文学という概念を確立する（第三章）。

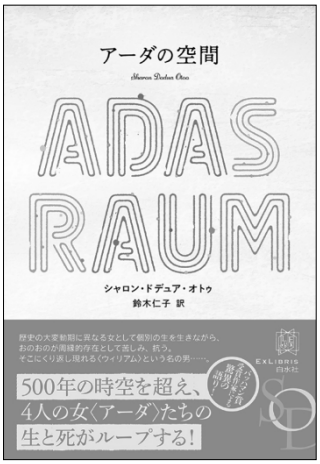
しかし 19 世紀になると国民国家体制のもと、ナショナリズムが台頭する。かつてこの概念は、コスモポリタニズムと対立するものではなかった点に、トレルチやブロッホは着眼した（第六章）。「よそもの」たちの言語表現によれば、ローカルなものが同時に世界を映し出す。19 世紀ドイツのとある土地を舞台とした『エフィ・ブリースト』（第四章）や、ドイツを描くことで世界市民を浮かび上がらせたマンの作品（第五章）がそうである。そう言えば、本書もドイツ語圏という限定された地域を扱いながら、同時に世界の近現代思想史を外観できる。

二度の世界大戦を経て、カントの理念の託された国連が誕生して久しい。21 世紀現在の世界情勢は果たしてどうだろうか。ユダヤ人として迫害され、移動を強要されたハンナ・アーレントは、「私が他者へと現れ、他者が私へと現れる」ポリスを思い描いていた（第七章）。今こそ我々は「よそもの」の視点から、わが国を、世界を眺めるべきであろう。

『ドイツ語圏のコスモポリタニズム――「よそもの」たちの系譜』（2023 年）
菅利恵編
菅利恵／高橋優／西尾宇広／磯崎康太郎／山室信高／吉田治代／渡名喜庸哲／新本史斉著
共和国　本体価格 3600 円

アーダの空間

シャロン・ドデュア・オトゥ著　鈴木仁子訳



小野　二葉（評）

小説は「内容」と「形式」の二つの要素から成っている、とあえて言ってみよう。「内容」がよい小説は、よく読まれる。ハラハラさせられるストーリー、あるいは含蓄の深い人生観、鋭い社会批判―しかしそこに「小説にしかできない表現」がなければ、物足りない。少なくとも私にとってはそうである。他方、「形式」にこだわった小説は、しばしば難解であると評される。複雑な語りの技法は、文学史の発展から必然的に選択されたものである（ことが多い）のだが、「形式のための形式」という印象が勝ってしまうと、読者はついてこられない。では「形式」が「内容」のために機能し、「内容」が「形式」に説得力を与える小説はどうか。いうまでもなく、その小説は傑作になる。

シャロン・ドデュア・オトゥ（Sharon Dodua Otoo）の長編『アーダの空間（Adas Raum）』は、そのような小説である。„Ada“という同じ名前を持つ四人の女性、すなわち 1459 年アフリカのアダー、1848 年英国のエイダ、1945 年ドイツのアダ、そして 2019 年、現代のベルリンのアーダの物語が、時空を超えたスケールで描かれる。彼女たちはいずれも「女性であるがゆえの」苦しみを経験する。また、作者同様ガーナにルーツを持つベルリンのアーダは、ヨーロッパに来たとたんに人種差別に苦しむことになる。まるで「女」や「黒人」は人間以下の存在であるかのように。

作者の発想の見事さは、抑圧された存在の物語を語るために、文字通り人間外の「モノ」を語り手に設定したことにある。語り手の「ワタシ」は、いずれ人間に生まれることにあこがれながらもいまだ果たせず、枝帚、ドアノッカー、部屋、イギリス国籍のパスポートとその都度姿を変えながら、„Ada“と、彼女たちの運命を左右することになる男性（ウィリアム）との邂逅を繰り返し証言する。この語り手「ワタシ」と„Ada“との関係性こそ、この小説のストーリーと語りの構造とを有機的に結びつける結節点なのだが、ここではただ以下の点を指摘しておこう。ドイツ語テクストでは、主人公の名前はいずれも„Ada“と表記されているが、訳者鈴木仁子氏は、上記の通り四人に異なるカタカナ表記を当て、書名を『アーダ（つまりベルリンのアーダと同じ表記）の空間』と訳出している。四人の女性の物語が最後にはベルリンのアーダに収れんされていく、とする訳者のこの解釈は、語る「ワタシ」が物語の最後にどうなったのかを考えるうえでも示唆に富む。語りの構造とストーリーが一つになるとき、読者は、作品としての統一性を強く印象付けられると同時に、繰り返される抑圧の歴史を超えていくための道が開かれるように感じるだろう。

『アーダの空間』（2023 年）
シャロン・ドデュア・オトゥ著　鈴木仁子訳
白水社　本体価格 3600 円

『ブッデンブローク家の人々』――『悲劇の誕生』のパロディとして

別府陽子著

斎藤　成夫（評）

トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』は言うまでもなく世界小説史上有数の傑作であるが、その評価に比して、実は論じるのが難しい小説でもある。それはこのロマーンが豪商マン家の年代記に取材した通時的体裁を帯びていること、物語としては文句なくおもしろいが、人格的・思想的動因を中心的テーマに据えていないことに起因している。そこに著者は「『悲劇の誕生』のパロディ」という、前例のない切り口でアプローチしてくる。実際同作品を『悲劇の誕生』もしくはパロディという観点で論じたものはない。

第1章から第3章までは『ブッデンブローク家』、『悲劇の誕生』、『意志と表象としての世界』の概説としても読め、その的確さ、明快さには目覚ましいものがある。特に第4－7章のトーマス・ブッデンブローク、とりわけ彼の性格・行動に表れた「アポロン的なもの」、「ディオニュソス的なもの」の分析は圧巻であり、この作品がショーペンハウアー、『悲劇の誕生』、ワーグナーの圧倒的影響下にあることを認識させる。また第8章での分身たる弟の性格破綻者クリスティアンの分析、第9－12章での女性登場人物たちのギリシャ女神との対照、第13章での息子ハノーの『トリスタンとイゾルデ』を中心とするワーグナーとの対比も目覚ましい。一方で著者は序においてパロディに関する定義について考究しているが、やはりパロディという概念は、ヘラーのように比喩的にいう場合（第11章）、もしくは転覆的意図でいう場合以外は、元となる事象の構成に沿って、それを揶揄もしくは風刺するものであって、当小説の反映のしかたはむしろアレゴリー、イロニーというべきものである。著者が特に『悲劇の誕生』の「パロディ」とする（S. 151）トーマス・ブッデンブロークの「ショーペンハウアー体験」について言っているように、たしかに「マンがトーマス・ブッデンブロークに表現したのはニーチェその人である」（S. 188）が、「それゆえ、「体験」における「三連星」の融合は、ニーチェの『悲劇の誕生』に表現されたショーペンハウアーとワーグナーの融合だということができる」（S. 141）のであり、だからといってそれが『悲劇の誕生』のパロディとまでいえるのか、評者には確信がもてなかった。

しかしそれで本書の価値が減じるということはまったくない。ショーペンハウアー／ニーチェ思想を切り口とした全篇にわたる解釈の的確さ、詳細な背景叙述は、ドイツを含めてかつてない水準に達している。本書によって、ついに『ブッデンブローク家の人々』のスタンダードな解釈は定まったといえよう。いまや我々は本書を規準として、さらにその先に行くべきときである。

『『ブッデンブローク家の人々』――『悲劇の誕生』のパロディとして』（2023年）
別府陽子著
鳥影社　本体価格2800円

ハルムスの世界

ダニイル・ハルムス著　増本浩子／ヴァレリー・グレチュコ訳

亀田　真澄（評）

ソ連の作家ダニイル・ハルムス（1905-42）は、とにかくあっけなく人々が死んだり消えたりする短編で知られる。「落ちていく老婆たち」（1936-37）はこんな作品だ。「ひとりの老婆が好奇心にかられて身を乗り出すうちに、窓から落ちて死んだ。もうひとりの老婆が窓から顔を出して、階下の、墜落死した老婆を見ていたが、好奇心にかられて身を乗り出すうちに、やはり窓から落ちて死んだ。その後、三人目の老婆が窓から落ちた。それから四人目が落ち、五人目が落ちた。六人目の老婆が落ちたとき、私は彼女たちの様子を見るのに飽きてきて、マリツォフスキー市場に行った。その市場では、ひとりの盲人に手編みのショールがプレゼントされたという噂だったからだ」。

スターリン時代に生きたハルムスは、当局からの批判をものともせずに発表のあてなく創作を続けた作家で、二度目の逮捕で命を落とした。ドイツ文学研究者の増本浩子氏とロシア文学研究者ヴァレリー・グレチュコ氏のタッグによる共訳書『ハルムスの世界』は、2010 年に出版された際にはハルムス作品を日本で初めてまとまったかたちで紹介したことが話題を呼んだ短編集であるが、本書はその増補改訂版である。これまで焦点を当てられなかった、ハルムスの児童文学作品も新たに訳出されている。

当時のソ連では夜中に逮捕された人がそのまま戻らないのが日常茶飯事であり、逮捕の理由はわからず、ランダムだったところがナチス＝ドイツとの大きな違いだ。また、消えた人については逮捕の事実を口にすることすら恐れられた。本書のコラムにある通り、逮捕されたと告げなければならないとき、代わりに「出張にでかけた」という婉曲語が用いられた。人は突如として日常から引き離されるものだと受け入れること、そして身近なだれかが突然いなくなっても気にしないことが、国家の定めた感情規範だった。ハルムスはその感情規範の世界を字義通りに現出することで、その不条理さを笑い飛ばした。この背景にあるのは、スターリン期の徹底的な言論封鎖と監視体制も、市民のブラックユーモアを抑えられなかった文化史だ。たとえば、一人が「アダムとイヴって、どこの国の人たちかな？」と聞くと、もう一人が「疑いなくソ連人だね。だって着るものはない、食べるものもリンゴひとつなのに、天国に住んでいたんだから」と答える、というアネクドートがある。ロシアによるウクライナ侵攻が終結を見ない現在、ロシアではスターリンを崇拝する動きが再び生まれているが、ハルムスはその裏で権力に対する、恐れを知らない批判精神が存在してきたことを痛感させる作家だ。

『ハルムスの世界』（2023 年）
ダニイル・ハルムス著　増本浩子／ヴァレリー・グレチュコ訳
白水社　本体価格 1700 円